

⑥ 神野市場の田に水を

私たちの町、紀美野町（旧美里町）には、広くて平らな土地はありません。そこで、昔の人々は山の斜面をだんだんにきりひらき、少しでも多くの米を作ろうと努力しました。

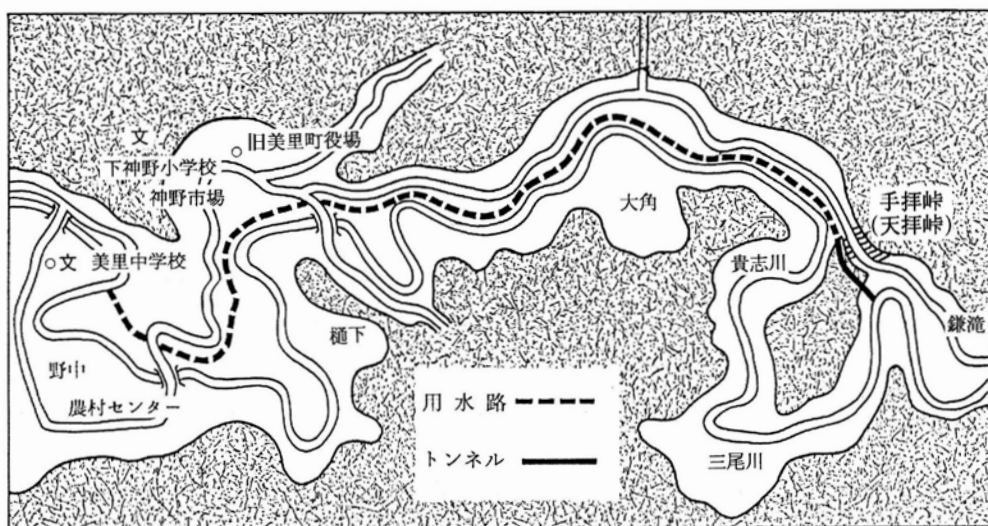
そのころは、山からわき出る水や、ため池の水を使って米を作っていたのですが、少し日照りが続くと、水がなくなり、いっしょうけんめい作りたいねがかれて実らないことが多く、人々は、

「水さえあれば、この下神野でももっと田を広げて、たくさんのお米がつくれるのに」といっつもくやしがつていました。



貴志川は、手拝峠の東がわで流れの向きを南に変え、大きく曲がって峠の西がわへ流れています。このあたりは、わりあい急な流れになっているため、西がわは、東がわにくらべて水面が下がっています。これに目をつけて、峠の東がわから、トンネルをほって水を流し、川にそって用水路を作れば、神野市場の田へ水をいれることができますと考えたのが、江戸時代の終わりごろ、箕六に生まれた貝尻兼蔵でした。

「なんとかして、神野市場の田に水を引きたい。たとえ人手やお金がいくらかかっても……。」



そう思った貝尻兼蔵は、農家の人たちに自分の考えを説明せつめいしましたが、当時の農家の人たちは、とうていそんなお金は出せないと行って、さんせいしてくれませんでした。

しかし、「人々のためになりたい。この土地のために何かしたい。」
といつも考えていた貝尻兼蔵は、自分の山を売ってお金を作り、トンネルをほる決心をしました。

一九一二年（明治四十五年）、トンネルをほる土地を買い取って、天拝峠の東がわと西がわから工事は始めはじられました。両方りょうほうからトンネルをほって行って、と中で出合おうというのです。

はじめは、木箱きばこをそりがわりにしましたが、おくへ進むにつれて、松まつの木で作ったレールをしいて、トロツコで土を運びだしたりしました。おくの方は、かたい岩やもろい岩が入りくんでいます。一日中、石の

みでたたいても、わずか数センチしか進まないこともありました。また、トンネルの中で、こわごわ火薬かやくを使って、とてもきけんな目にあつたこともありました。

さらに、たいへんなことがおこりました。きよりを計算すると、そろそろ出合うはずなのに、ほつてもほつても、まったく出合うことができないのです。貝尻兼蔵は、なやみました。なかには、

「この工事は、もうだめだ。はじめから、むりな仕事だつたんだ。」とあきらめる人もでてきました。

それでも、貝尻兼蔵は、もう一度測量そくりようをしなおし、トンネルの中に入つて調べました。そして、上下じょうげに二メートル五十センチほどのちがいがあることがわかりました。さつそくほりなおしの工事にかかりました。

工事が始まつて三年目のことです。五十メートルほどのトンネルは、

天拝峠の下の岩の中で、みごとにつながりました。

この神野市場の田に、はじめて貴志川の水が流れてきたのは、一九一四年（大正三年）のまだ寒い日でした。

村人は、夢ゆめのような気持ちで水を見つけていました。寒いことなどわすれたように、水路へとびおりてしまふ者までありました。

貝尻兼蔵は、そんな村人と苦心の末できあがった用水路をながめながら、目に涙なみだがこみ上げてくるを止めることはできませんでした。

そして、この貝尻用水は、今なお神野市場の田にたくさん水を運んでくれるのです。